

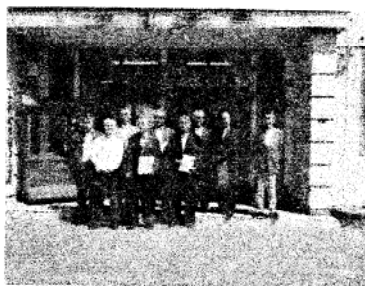
木村文助研究

通信 24号 二〇一一年・一一・一〇

北秋田市議員一行

郷土資料館「赤い鳥」

木村文助「コーナー」



七月七日、北秋田市議会運営委員（米沢一委員長）一行が郷土資料館を訪れた。視察研修の一環で北秋田市出身の大野尋常高等小学校長木村文助の業績を調査するためだった。

木村は秋田県で教員をしていたが函館師範学校長和田喜八郎（同県出身）の招きで来道、大正七年大野小へ校長兼訓導として赴任し、三六歳だった。綴り方指導、そして斬新な学校教育推進に一〇年間力を尽くした。

「赤い鳥・木村文助」コーナーに木村の編著書や綴り方入選作が載る「赤い鳥」など多数展示されている。

議員らは解説を聞き資料を丹念に閲覧し研修を深め、郷土出身者の業績に誇りを感じたようだ。

これを縁に北秋田市と北斗市の交流を一層図りたいものだ。

二〇一一年

- 五・一 北海道文化財保護協会文化情報に掲載「北斗市に甦った綴り方の世界」合唱劇実行委員会事務局局長 前田治
- 五・六 「木村文助研究」通信23号発行
- 五・一 リーフ作成「綴り方生活 村の子供」
- 六・一 リーフ更新「木村文助」
- 七・三 北斗市教育広報「きらめき」No.21に掲載『山の家』（推奨）大野小尋六・金沢みつ
- 七・七 北秋田市議員一行、郷土資料館「赤い鳥・木村文助」コーナー視察研修
- 七・九 「郷土出身木村文助の功績に感激 北秋田市議が資料館見学」・函館新聞
- 七・一九 「郷土の偉人を発見 北海道で木村文助の顕彰施設訪問 北秋田市議運委」・おおだて新報
- 八・一三 年表「木村文助」作成及びコーナー掲示
- 八・二八 函館博物館友の会一行、郷土資料館「赤い鳥・木村文助」コーナー見学
- 一〇・三 北斗市教育広報「きらめき」No.22に掲載『右の手』（推奨）大野小高一・川口良子
- 一〇・一二 道南の今金町文化財審議委員会一行、郷土資料館「赤い鳥・木村文助」コーナー研修視察
- 一一・五く六 北斗市大野地区文化祭（公民館・スポーツセンター・郷土資料館など）

連載 『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子供たちの綴方(作文)や絵を投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」と言われました。

山の家 (推奨)

大野小 第六 釜澤みつ

私は小さい時から、両親と別れて、祖父の家で暮らしていた。

去年の田植え休みのときであった。ガロー鉢山の父のところへ着物を買ってくれと手紙をやる。母から「父が怪我をして函館の横山病院へ行くとところだから、休み中しんぼうせよ」という手紙がきた。二日ばかりして爺ちゃんが「み(みつ)、ガローさへ行って子守でもして来い」と言っていて五円札を出したから、それを持って翌日朝早く握り飯を二つ持って、一番汽車で急いで行った。

上磯の会社から鉢山の電車へ乗って一時間ばかりも行くと、終点だったので、電車を降りると、走って家へ行った。すると家の中には、弟たちが二人いて「父ちゃん、母ちゃん、おいお

い」と言っていて泣いていた。座敷の隅にお膳があつて、茶碗や飯粒が、そつちこつちに散らばつていた。私が行くと、二人はなおも声高く泣くので、「母ちゃんどこさ(へ)行ったの?」と聞く

と、「知らね(知らない)、おいおい」と泣くので、小さい方をおぶつて、大きいほうの手を引いて、会社の方へ行くと「み」とどこかで呼ぶので、見ると、右手の高いがけの上で母が石を落としていたから「母ちゃん」と言つて、弟の手をはなして走つていくと、「母ちゃんは、こうして稼いでいるんだよ」と言つたので、私は知らないまに(知らず知らずに)、涙がながれてきた。

私は母の顔を見て、「母ちゃん、帰るべ(帰ろう帰ろう)」と言つると、母は「帰れば今日食う米買われぬし、父ちゃんにも送つてやること出来ねんだ」と言つた。私は腰に結んでいた

風呂敷をほどいて、爺ちゃんのよこした五円札を母に渡して、家に帰つた。

私はわらびをとつて売るつもりで、縄と風呂敷を持って、二人の弟をつれて、村の山へ行つたが、わらびは一本もなかった。すると弟が「おど居てあつた山にだらある(父さんがいた山に)

ならある」と言つたので、そつちへ行くと、たくさんあつた。私は弟にも背負わせ、自分でも少し持つて家に来たが、まだ母は帰つていなかった。私は二人の弟をつれて、わらびを売りに行つたが、或家の戸口まで行つたが恥ずかしくて入れないので、小さい弟に「お前入れ」と言う

と、「いらねいや、姉入れ」と言つたら、大きい方の弟が「おら行つて売つて来る」と言つて中へ入つた。私は少しはなれて

まつていると、弟は錢を握つて走つて来た。私は面白くなって、四、五軒の家で皆売つてしまつた。帰つて来たら母は御飯をたいていた。(昭和二年七月号)

■ことばの意味
【田植え休み】農村では、田植えが忙しい時期に、手伝いのために学校が休みになった。

綴方選評

鈴木三重吉

釜澤みつさんの「山の家」は、一行一行がひしひしと胸を打つて、しみじみと痛ましく、涙くしくさえなつて来ます。叙写はたどたどしいものですが、あ

あした事実と、それを表出する真実、素朴な態度との牽引です。お父さんが入院されたあとの山の家へ出かけると、お母さんもおられなくて、二人の弟さんが泣いている。茶碗や飯粒がちらばつている光景や、みつさんが泣いている二人をおぶつたり、手を引いたりして、お母さんを探しに行く、

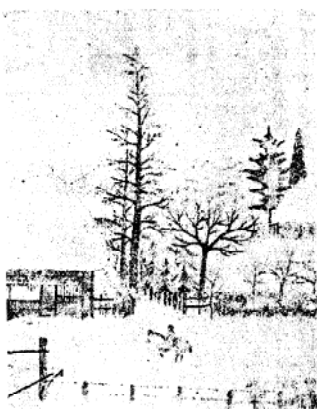
がけの上で、お母さんが石を落としておられる。それを見つけて、思わず弟さんの手をはなして走つていくところ、そこでのお母さんとの対話、お母さんの手助けに、わらびをとつて売ろうとする気持ち、やつとつて売りに行くところなどは、たつたあれだけの描写にもかかわらず、おのおの場面の実感がまざまざと生き踊つていて、この上なく哀れです。はじめはわらびを買つてくれと言うのが恥ずかしくて弟さんを入らせたが、売れるとおもしろくなって、四、五軒まわつて、すっかり売つてしまつたという、その喜びさえも哀れに痛々しい気がします。

しかし考え直すと、ああした中に立つても、これだけの純情と純感に光つているみつさんは、どんな表面的に幸福な子供よりも、もつともつと深く神から恵まれてる貴い子です。

自由画選評

山本 鼎

奥山吉太郎君の「北海道風景」枯木立がよく描けている。雪景色の感じも十分である。もう少し自然の濃淡の面白味を見てほしい。
(編集 社会教育課 八木橋直弘)



北海道風景

大野小高二 奥山吉太郎 (昭和二年四月号)

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子どもたちの綴方(作文)や絵を投稿し次々と入選。「日本の綴方学校」と言われました。

右の手

大野小高一川口良子

私は二つの時、はって行つて熱い湯の中へ右手を入れて火傷をしたので、すぐ医者にかかったのですが、下手したものが、とうとう右の手が曲がってしまいました。それが手が痛いので曲げていたのを、そのまま包帯してあるうち、皮がついてとうとう曲がったのだそうです。小さい時にはそう気にも掛かませんでしたが、今は手が伸びるに従つて中の皮が縮まってくるのです。

尋常五年の体操の時、先生が「どうして手を上げない。こうして上げれ」と教えておりました。その時、私は自分の手の曲がっているのも気づかず、自分も他人と同じように(真つ)直ぐに上げていたものだと思つておりました。その時、先生は教壇

手を上げれば何も言われない(けれど)、恥ずかしさと悲しみが湧いて来るのです。

そのうちに後ろの方で笑うような声がありました。私は自分の手を笑っているかと思つて、ぎつしり手を握つてしまいました。暫くするうちに、男生(男子生徒)が私の手に気がついたものか、隣へつき、向こうへつきして、私の手を見てくすくす笑っているのです。私は手を下ろせば先生に叱られるし、上げれば笑われるしと思つて、手を上げたり下げたりしておりました。その間も絶えず先生に叱られるはしないかと、はかばか(はらはら)しておりました。いいあんばい(具合)に見つけられず、それですみました。

(大正十一年十月号)

【下手した】失敗した。うまくいかなかった。

【どし】癩病(ハンセン病)を差別的に呼んだ方言。慢性細菌感染症だが、感染力は弱く、潜伏期間が長いため、かつては遺伝性と誤解された。主に末梢神経が冒され、知覚麻痺・神経痛や皮膚症状のほか、脱毛、顔面や手指の変形などもみられる。国の隔離政策によって、ハンセン

病は感染力が強いという間違つた考えが広まり、偏見を大きくしたといわれ、経済的被害や人権上の制限・差別を受けた。近年は有効な化学療法剤がある。【疑念】木村文助校長時代の大野小学校が、集中心力を高めるため、教育の一環として全校児童で取り組んだ瞑想するようにじつと考える時間。

綴方選評

鈴木三重吉

大野小学校から送られた作品は、いずれも揃つていて、いいものでした。

川口さんの「右の手」は、女の子としてきまりを悪がる心持が哀れなほどよく写されています。ほかの子たちが伝染でもするように、虐げたりするのはあんまりですね。しかし川口さんも、そういうつまでも恥ずかしがったところで仕方がありません。全然平気になつておしまいなさい。

自由画選評

山本 鼎

吉田孫七君の「雪景色」は景色の情趣よく現れている。素描の純粹さは見ていてあきない。右手の枯れ木が、ちと(少し)ごつごつしている。中景の、空へ斜めに出ている二本の木のように、伸び伸びするとよいのだが。(編集・社会教育課 八本橋直弘)

※漢字やかな遣いは現代風に改め、わかりにくい表現はかつこ書きで補足しました。



雪景色

大野小尋六 吉田孫七

(昭和2年4月号)

《北斗市郷土資料館内》

北斗市郷土資料館 (旧大野町郷土資料室)

041-1201

北海道北斗市本町2丁目12番7号

TEL (0138) 77-6681

開 覧 9:00~16:00

休 館 毎月第一月曜、年末・年始、臨時

「林芙美子作短編小説に引用」、
「ラジオ放送に引用」、
「北海道教育史に掲載」、
「短編小説的と評価された」など多数の綴り方を収蔵!

『1920年代(大正から昭和初期)の田舎の生活・文化がリアルに表現・都会の先生が読むと子どもたちは声も出なかったという』

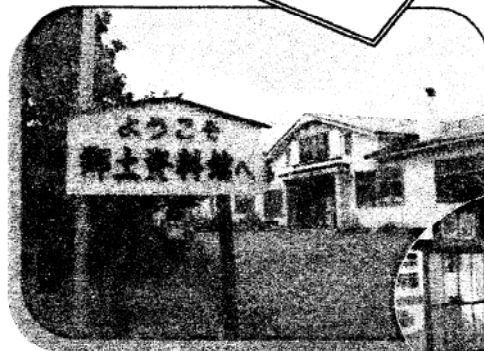


生活綴り方のふるさとを訪ねてみよう!

(「赤い鳥」復刻版全巻、木村文助編著書、写真など多数)

- 函館方面→車で、国道227号を通り大野市街地へ入る
- 道北方面→車で、国道5号の大沼トンネルを抜け、10分ほどして大野方向へ右折し、更に市街地へ進み5分で着く

発行・大野文化財保護研究会
(略称:文保研・ぶんぼけん)
会長:木下寿美夫
○四一―二二〇一
北斗市本町3丁目11番32号
(0138) 77・8535



大野地区市街地の大野小学校門を入り右側木造の建物

